ISSN 1344-4689

埼玉県大学・短期大学図書館協議会

SALA
Saitama Academic Library Association

No.19
2011.3.31

会報

http://www.sala.gr.jp/

第23回総会記念講演

図書館は、無数の「知の参照系」を提供する機関である

跡見学園女子大学図書館長　曽田修司

「図書館は大学の経営資源である。」

大学図書館についてのこのテーゼ自体は、誰であれ首肯されるのではないでしょうか。しかし、その具体的な意味づけについては、いろいろな考え方があると思います。大学図書館の顧客としてすぐに思い浮かぶのは、学生、教職員（もっと大きく言えば､「社会」ということになります）ですが、ここでは学生を対象として考えることにします。

私は図書館長に就任したばかりで、専門家の立場から図書館のあり方について論じる用意はありません。そのかわり、以下、やや遠回りになりますが、私が考える図書館の社会的な役割について、私がこれまで研究及び実践に関わってきた文化政策の分野の事例を題材として取り上げ､「参照系」という言葉を使ってご説明します。

ここで、特に強調しておきたいのは、知識というもの、あるいは、文化というものが、資源であり、資本であるという視点です。知識や文化は、それを利用することによって、人間の活動が豊かになるという性質を持っています。私たちは、それを蓄積して、さらに次の活動に生かすということを、特にそれと意識しなくとも日常的に実践しているのです。

さて、文化政策については、残念なことに、ごく狭い範囲の限られた人々の活動だけを対象としているもので自分には直接関係ない、という認識を多くの人たちが持っているようです。2009年の政権交代の後に大きな話題となった行政刷新会議の「事業仕分け」でも、文化事業に税金を投入することの意味と必要性について疑問が投げかけられ、いかにも性急なやり方で廃止や縮減が求められたことをご記憶の方もいらっしゃるかも知れません。

ですが、文化あるいは文化政策は、私たち全員に関わるものです。そこで、アーティストの創作行為が持つ公共性とはどういうものかを以下に考察してみます。

チェルフィッチュというユニット（グループ）名で活動している岡田利規という劇作家、演出家がいて、その代表作に「三月の5日間」（2005年第49回岸田國士戯曲賞受賞）という作品があります。

2003年3月、イラク戦争がいまにも始まろうとしている時期に、六本木のライブハウスで、カナダから来たPMEというパフォーマンスグループのライブが行われていて、音楽の演奏の合間に、もうすぐ起ころうとしている戦争についてそこにいる人たちが意見を言い合う「政治フォーラムのようなパフォーマンス」が行われていました。「三月の5日間」は、たまたまそこに居合わせた若い男女が、その後、そのまま渋谷のラブホテルに行くことになって、それから4泊5日、そのラブホテルに居続ける、そして、その5日間のあいだに、戦争は始まり、そして終わってしまった、という話です。

この作品では、正面から政治を扱っているわけではありません。社会通念から言えば、およそ立派でもなければ褒められもしない、非社会的な若者の行動を淡々と描いているわけですが、戦争という大事件の一方に、ラブホテルに閉じこもってテレビも新聞も一切みない、携帯も切ったまま、という一種の極限状態にある若者の生態を描いていて、とてもリアリティがあり、ある種の衝撃力を持った作品です。岡田氏自身は、新聞の取材に対して、「戦争へのアクセスは、ニュースを見続けることだけではない。見ないと決めている男女が、関心がないわけではない、ということを書いた」と答えています。

チェルフィッチュの舞台には、他では見られないユニークな特徴がたくさんあります。そのひとつは、俳優が演じる役柄と俳優との一対一の対応がないことです。同じ人物の台詞が複数の俳優によって語られ、逆に、ひとりの俳優が語っている台詞がいったい誰の台詞なのかわからないことが多くあります。「･･･それで今の話はあとでミノベくんに会ってアズマくんが聞いた話だったんですけど、･･･」というような説明の台詞をはさみつつ、だらだらとした会話が途切れることなく続きます。近代演劇の技法では、舞台

に立っている俳優がある特定の人物になりきることによって、強い怒りや悲しみや喜びなどの感情の高ぶりを表現して観客に伝えることが常識とされてきたのですが、それがここでは完全に拒否されています。

そのかわりに、そのことをしゃべっている人物の、照れやためらいやこだわりといったものが、非常にリアルにストレートに見ている側に伝わります。そして、いつのまにか場面が変わって、その場にいた別の人の視点で同じ話が語り直されます。人が違えば見方が当然違っているので、話される内容自体はほぼ同じ内容なのに、話の中身には微妙なズレが生じます。このように、「反復とずれ」が延々続くので、批評の言語では、これはミニマリズムだ、という言われ方もします。複数の視点が同時に存在しているので、これは演劇のキュービズムだ、という言い方もされます。

チェルフィッチュの舞台は、一度に何万人の観客を集めるようなものではありません。また、取り上げる題材も、取り上げ方も、社会の常識あるいは良識に沿ったものでもありません。ですが、「三月の5日間」に限らず、優れた舞台には、それを見ている人に、この舞台は私にも関わりがある、舞台の上にいるのは私だ、ということを感じさせる力があります。その作品に触れることによって、これまでと違った世界が現れ、これまでと違った感覚や思考を発見する人がいます。この舞台を見たことによって、自分が内に持っていた思いがどういうものだったかを知ることができ、自分の居場所があると感じた、ということがたしかにあったに違いありません。その意味で、チェルフィッチュの作品は、それを見る観客の狭いサークル内でしか通用しないわけではなく、すべての人にとって大きな意味を持っているということができます。

このように、これまで誰も書かなかった舞台作品、誰も取り上げなかった題材による新たな視点を提示することは、作家個人の想像力や世界観（これを私は、新たな「参照系」と呼びます）が公開され共有されることであり、そこには公共性があると私は考えます。ことに、岡田氏が独自の視点で「自分の（内面）世界と自分の外側にある世界を統合する」方法を提示していることの重要性を指摘しておきたいと思います。

さて、ここでようやく、図書館に話を転じます。図書館の特質は、資料を幅広く収集し、それを公開して多くの人たちの利用に供するところにあり、そこに図書館の公共性があります。したがって、図書館の役割とは、多くの人が求めている読書ニーズに応えることだ、という答えも正解に違いなく、一般にはそのように受け取られていると思います。ですが、そこにとどまらず、アーティストによる新しい参照系の提示という意味合いでの公共性のアナロジーで図書館の公共性を考えてはどうかと思います。図書の場合、アーティストにあたるのは、もちろん、作家、編集者です。とすれば、「図書館とは、古今東西に及ぶ無数の作家、編集者による、あらゆる知の参照系を提供する機関である」ということになります。参照系とは、さきほどの岡田氏の作品に見られたような、独自の視点を持った世界観と言うべきものを示す語です。図書館にアクセスが可能であることは、自己や世界に関する個人の狭い認識の限界を飛び越えて、多様な参照系からものごとを見ることを可能にします。読書によって新たな発見や知識を共有することの恩恵は、アートにおける新たな表現の発見と同じように、基本的にすべての人に及びます。まさに、図書館は、無数の参照系を提供する「知のインフラ」なのです。実は、図書館も博物館も、その特質は互いによく似ており、最近になってMLA連携（博物館、図書館、アーカイブ間の連携）が注目されてきているのは理由のないことではありません。近年、千代田区立図書館や旭山動物園などの成功事例がよく知られるようになってきたように、図書館や博物館は知的エンタテインメントの宝庫です。読書や研究という行為は、新たな知の獲得による世界の探求であり、それによって「自分の中で世界を統合する」行為であるとも言えます。言葉にすると大げさなようですが、古来、このことが学問というものの持つ意味であったわけです。

ここで、冒頭のテーゼに戻ります。大学図書館は、学生たちの関心を大学に振り向けるための絶好の入り口です。知識を身につけることで、世界がそれまでとは違った姿で見えてくるとともに、それによって自分の存在を意味づけることができるようになる。そのような知的営為のための環境が図書館に整えられていることは、学生が大学から受け取ることができる恩恵のうちの最大のもののひとつであると言ってよいでしょう。

まずは、身近な顧客である学生にそのことに気づいてもらうことが学生の大きな成長につながり、大学の社会的存在価値を高め、それが大学経営上のコアコンピテンス（基幹的競争力）になるのだと言ってよいでしょう。

以上のような理念を具現化するには、たとえばラーニングコモンズのような、学生の好奇心を刺激し積極的学修を促す実践的なしくみづくりが重要です。「言うは易く行うは難し」であろうことを自覚しつつ、知的冒険の世界への導き手としての図書館の大きな可能性に着目して、「図書館は大学の最大の経営資源である」と私は申し上げたいのです。

第22回研修会講演①

IRcuresILLからrliaisonプロジェクトへ：リポジトリと図書館活動の接点を探して

小樽商科大学学術情報課情報普及係　南　絵里子

● Barrelについて

小樽商科大学のリポジトリは、小樽商科大学学術成果コレクション、愛称はBarrelといいます。Barrelは大きな樽という意味です。小樽の「樽」は小さな樽ですが、小さな樽ではなく大きな樽いっぱいに小樽商科大学の研究成果を保存し公開していきたいという願いをこめて名づけました。

小樽商科大学の特徴として、図書館を利用する教員と図書館職員との距離が近いということがあります。また、文系という分野の特性からか、雑誌をそのままスキャンしてリポジトリに掲載してもよいと許されることが多く、リポジトリに登録している学術雑誌論文のうち95%は出版者版となっています。また、日本語の文献が87%と多いことも特徴のひとつです。

文献収集にあたり、教員とのマンツーマン体制をとりました。教員一人につき、担当者が一人つき、出版者への問合せ作業、登録作業、教員との連絡調整などリポジトリにかかわる業務を担当者制で分担してきました。リポジトリは図書館の3係5名からなるワーキンググループが中心となって運営していますが、メンバーはもともと目録、システム、カウンター業務、雑誌、ILLなどの業務をそれぞれ担当しており、リポジトリ業務を片手間でやるのではなく、全員の仕事の中に根付いていけるようにしたいと考えました。そういったなかで、たとえば、リポジトリとILLは、文献供給サービスという意味では同じであり、従来の業務とリポジトリの業務を接近させ、効率的に運用することはできないだろうか、と考えるようになりIRcuresILLプロジェクトがうまれました。

● IRcuresILLプロジェクトについて

IRcuresILLプロジェクトは、国立情報学研究所のCSI事業領域2として採択され平成20年度から21年度にかけて小樽商科大学と北海道大学が中心となって活動したプロジェクトです。リポジトリを充実させることで、少しでもILL業務の負荷を減少できないか、逆にILLでどんな文献が求められているか、という生の情報をリポジトリのコンテンツ構築のペースメーカーにしていくことは可能なのかということを考えました。2年間の委託事業期間中、DRF参加86機関のILL担当者、リポジトリ担当者へのアンケート実施、NACIS-ILL3年分のデータ分析・動向調査、有志の図書館職員のチームI'llの結成、平成21年のオープンアクセスウィークに合わせたポスター・チラシ作成、平成20年度NACSIS-ILLデータ分析結果リクエスト数上位論文の筆頭著者へのアンケートといった活動を行ってきました。どのようにしてILLで依頼されている文献複写をリポジトリ登録へ反映したらよいのか、その最適な手法は確立には至りませんでしたが、オープンアクセスは機関リポジトリ担当者だけが背負っていくのではなく、図書館界全体の課題であると認識を新たにしました。そして、ILLなどの伝統的な図書館活動とリポジトリとの接点は他にもあるはずと考え、DRFの機関紙発行などの活動に、課題意識を継承することとし、rliaisonプロジェクトに活動をシフトしていきました。

● rliaisonプロジェクトについて

このプロジェクトは、平成22年4月からの取り組みで、組織的な意識喚起活動による教員との連携強化、リポジトリへの文献登録の義務化方針を含む制度構築という2つのアプローチにより、リポジトリのコンテンツ増加と図書館の研究支援機能強化を目指しています。インターネット時代に希薄化していく教員との関係回復、維持を最大の目的としています。小樽商科大学、帯広畜産大学、北海道大学を中心として活動を行っており、全国のメンバーとメーリングリストで情報共有を行っています。

組織的な意識喚起活動として、小樽商科大学は平成22年7月から専属司書制度を開始しました。これまでのマンツーマン体制を強化し、教員一人につき二人の図書館職員が担当として、リポジトリをはじめとして、その教員に対する図書館サービス全体の質問、要望などを受け付ける窓口になるというものですが、二人体制にした理由は図書館側の人事異動で、それまでに築いてきた教員との関係が失われてしまうことを防ぐためです。二人の担当者が中心として、全教員を対象とした年1回程度の定期的な研究室訪問に取り組んでいます。

小樽商科大学図書館では、今まで図書館の中で仕事をしてきた図書館職員がリポジトリという仕事を通じて、教員と対話し、教員の研究内容について理解しようとしたり、図書館についても知ってもらう働きかけをすることで、お互いの距離が少し縮まったように思います。小樽商科大学では、これからも、教員の声を取り入れ、リポジトリをきっかけとして、大学の中で存在感がある図書館を目指し、図書館サービス全体を向上させていきたいと思っています。

第22回研修会講演②

ご依頼いただいた文献は○○で入手できます：ILLサービスのキャンセル事例から考える文献の流通環境と図書館サービス

文教大学越谷図書館　鈴木正紀

1. 問題の所在

当館のILLサービスにおける文献複写物提供サービス（当館利用者から他館所蔵資料取り寄せ依頼）において、ILL担当者は受け付けたリクエスト資料が図書館で所蔵されているなど、他機関への依頼をせずとも入手できるかどうか調べた上で、他機関に依頼しなくてはならないもののみを依頼している。その必要がない依頼データについては、申し込み者に対して、入手するための情報を提供し（図書館で所蔵している、インターネット上にあるなど）依頼についてはキャンセルする、という形で連絡をしている。

ILL統計の経年変化をみると、このキャンセル数が2008年度が108件であったのに対し、翌年度は599件と5.5倍増えている。これは、利用者が自分で入手できるにもかかわらず、それに気付かず他機関への取り寄せリクエストをしていることになる。

なぜそうしたことが起こるのか。その原因を、キャンセルデータを分析することによって検討した。

2. 当館のILL業務とリクエスト件数

当館では、非常勤職員2名がILLの依頼と受付の実務を担当し、専任職員1名が、レファレンス業務を兼務しながら、調整を行うという体制を取っている。

リクエスト件数について、2001年度から2009年度までの推移をみると以下のとおりとなっている。

年度	件数	年度	件数
2001	643	2006	1,634
2002	741	2007	1,470
2003	1,056	2008	1,811
2004	1,233	2009	2,122
2005	1,040		

全体としてリクエストは増加していることが見て取れる。

3.2009年度の状況

2009年度と、比較のため、その前年の複写依頼データを以下に示す。

	2008	2009
合計	1,811	2,122
確認（実数）	1,703	1,523
キャンセル（同）	108	599
確認（%）	94.0%	71.8%
キャンセル（同）	6.0%	28.2%

キャンセルが、2008年度が6%程度であったのに対し、2009年度は28.2%と飛躍的に増加していることが確認できる。ちなみに、2001年度から2007年度にかけて、キャンセル率は年によって多少の上下はあるものの、おおむね2%台を推移している。

4. 環境変化

2008年度から2009年度にかけて、利用者のILLサービスとその前提となる文献探索環境については、以下の変化があった。

(1) 2009年度からILLリクエストはマイライブラリからのみ依頼するということで実施している。
(2) リンクリゾルバを導入した。

5. キャンセル理由

繰り返しになるが、担当者がリクエストをキャンセルする際には、その理由（主にどうすれば入手できるか）を依頼者に伝えている。キャンセル理由の上位5位は以下のようになっている（カッコ内は件数）。

(1) 図書館で所蔵している（275）
(2) インターネットで見ることができる（59）
(3) 電子ジャーナルで見ることができる（42）
(4) 機関リポジトリで公開されている（39）
(5) 研究室で所蔵している（35）

それに続いて6位は「CiNiiで見ることができる」が続く。

6. 考察

上で挙げた2つの環境変化から類推できるのは、以下の2点である。

(1) 利用者は、マイライブラリ機能を使ってこれまで以上に容易に「非所蔵文献」の取り寄せができるようになった。（依頼総数は増加している）
(2) しかし、必要としている文献が何らかの方法によって自力で入手できる可能性を見逃してしまっている。あるいは気づけないでいる。あるいは、頼めば「図書館が探してくれる」という安易な態度がないとはいえない（ようだ：伝聞による）。

ここから指摘できるのは、1つには現在の情報利用環境における文献の所在のつかみ難さ――媒体の多様化（印刷体／電子媒体）とそれをナビゲートするために考案されたリンクリゾルバの有用性と現時点での限界である。これにより、利用者とILL担当者双方に無駄な労力をかけざるを得ないという状況が発生している。2つ目は、ILL業務の役割の変化である。

リンクリゾルバは確かに求める資料の電子媒体の存在、それがない場合の入手のための代替手段の提示（所蔵資料検索、ILLリクエストへのナビゲーション）をしてくれるが、当館の場合のキャンセル理由からわかることは、電子媒体が存在しない場合の次の段階である所蔵資料の探索に利用者が向かわないことである。しかしこれは向かわないの

ではなく「向かえない」、つまりあナビゲーション環境が十分ではないということが指摘できる。具体的には、リゾルバを起動した際に表示される「中間窓」のデザインの問題に起因することが多いように思われる。これは大いに改善の余地があるはずである。

電子メディアが普及する中において、利用者にリモートサービスの環境に習熟してもらうことは大切なことである。当館でILLリクエストをマイライブラリに限定したのはそうしたことにおけるエクササイズ的効用を考えたことも一因としてある。しかし、紙で申し込みを受け付けていた時代には、レファレンス担当者が、申し込まれた段階で、その入手可能性を利用者とともに調査していたものが、現在ではILL担当者が申込者とダイレクトにつながってしまったために、そうした機能をILL担当者が負わざるを得ない状況になっている。ILL担当者に求められる役割は変化しかつ高度化している。

事例報告①

「紀要の電子化にあたって～埼玉学園大学の場合～」

埼玉学園大学・川口短期大学情報メディアセンター　関矢　久美子

≪投稿規程の改正≫

本学の紀要電子化は、平成15年10月、NII「研究紀要公開支援事業」の通知を機に、本格的に開始されました。

本学が支援事業に参加するためには、紀要投稿規程に「著作権」及び「電子化公開」に関する条文を規定する必要がありました。2名職場のため、より簡易的な許諾事務の方法を探ることにし、まずは、次の4つの方法で学術雑誌や大学紀要における事例を集めました。

(1) 他機関出版物
(2) 他機関HP
(3) 大学図書館問題研究会ML
(4) 他大学職員

その結果、「投稿申請」=「電子媒体での公開を許諾」という構図ができ、平成16年4月から「著作権」及び「電子化公開」を網羅した規程が施行され、電子化公開が実現しています。

≪紀要担当部署の問題≫

情報収集の中で、紀要発行が図書館ではなく、「発行」「収集・保存」部署が異なる大学も多くあることが判明しました。事務組織や、委員会運営方針等の問題で、図書館主導で規程改正等の行動を起こすことが困難な場合も多く、紀要電子化が進まない一因でもあることを実感しました。

≪既刊号執筆者への許諾依頼≫

本学は開学4年目だった為、許諾は比較的容易でした。

この時に使用した許諾書は、事前に掲載巻号、論文名を印字し、執筆者には日付、住所、氏名の記載と捺印のみを依頼しました。また、現在の投稿申請書は、投稿巻号及び「掲載された著作物に関して、埼玉学園大学が複製（複製権）、公衆送信（公衆送信権）および電子化による公開を行うことを許諾します」との記載があり、捺印が必要です。

過去の許諾依頼は、発行巻号が増加した分、大変になることを念頭に置き、早めに策を講じることが必要です。

≪今後の課題≫

本学における今後の課題の一つは、「冊子体の発行を維持するのか」ということですが、冊子体としての存在意義を訴える意見もあり、まだまだ検討が必要です。

事例報告②

地域共同リポジトリSUCRA ～参加までとこれからと～

埼玉女子短期大学図書館　湊　伸子

1. 埼玉女子短期大学の概要

1989年狭山市に、商学科・英語科の2学科で開学、1999年に日高市に移転した。以前から導入していた、学生が将来就きたい職業と直結した「コース制」を本格的に進め、コースとインターンシップとの連携を強化することで2004年に「現代GP」に採択された短大である。

2. リポジトリ以前

2003年秋にNIIの電子化サービス事業への参加が決定し、著作権の処理が必要になったが、退職教員を含めた執筆者全員に公開への許諾を得るという方法を取った。電子化されたデータを順次入力し、新規の著者にはその都度許諾を得ながら登録を続けていた。

3. リポジトリ参加の経緯

SALAからリポジトリ参加への誘いがあった当時、図書館長は文部科学省出身で、リポジトリの意義を良く理解しており、コストがかからないこと、「SUCRA」への信頼感、今後の短大運営上も意義がある、など参加に積極的であった。一方、学内の不安感・抵抗感は個々の教員が公表の

是非を判断できることで説得した。

4. SUCRA 登録まで

NIIの「学術雑誌公開支援事業」を利用して、毎年登録を続けていたCi-Nii掲載論文をデータで取得した。実際の登録には埼玉大学図書館の絶大な支援をいただき無事一括入力を果たすことが出来た。

5. 参加後のようす

論文がダウンロードされていることが実感できるなど、研究成果の可視性の向上は大きなメリットである。今後も紀要以外の研究成果を継続的に掲載していきたい。

事例報告③

紀要の電子化で変わったこと

聖学院大学総合図書館　菊池　美紀

本学は上尾市にあり、3学部6学科と大学院からなる学生数2,700人程度の小規模大学である。キリスト教のミッションのもとに建てられ、建学の精神として「神を仰ぎ、人に仕う」を掲げている。

本学の紀要は『聖学院大学論叢』である。図書委員会内に設置された論叢委員会が編集を、その事務を図書館が担当している。2002年のNIIの学術雑誌公開支援事業をきっかけに電子化を検討したが反対があり、電子化はこの事業に頼らず、段階的に進めることになった。電子化の方針を作成するかたわら、CD-ROMを配布するによりWeb版のイメージを共有。また個別に電子化の許諾をとるようにしたことで反対はなくなり、翌年にはHP上での公開にまでこぎつけた。2007年には投稿規程に“電子化を原則とする"ことが明記された。この時のデータがリポジトリ「SERVE」の核となっていった。

紀要の電子化により変わったことが4つある。1つは、図書館と紀要との関係である。紀要に図書館が積極的に関わるようになり、規程の作成と運用の見直しを行った。これにより論叢委員会の権限や役割が明確になり、図書館の業務に「委員会活動」がはっきりと位置づけられた。2つ目は印刷所である。2008年、電子化を含めた提案による相見積もりを実施した。結果、作成費用は抑えられ、校正を補助するサービスが追加された。3つ目は発行部数である。アンケートによる送付先の見直しと停止、保存のための余部作成の停止から発行部数が段階的に削減された。それは結果として、保管場所と予算の削減にもつながっていった。4つ目はリポジトリ「SERVE」の構築とCSI委託事業の採択である。「SERVE」は図書館の活動を大きく広げた。

現在は、印刷所を移行して2年目である。慣習が見直され、運用が透明化されてきた。それは「SERVE」によるWeb公開という効果と共に、『論叢』への投稿増加に繋がっている。また『論叢』に関わることで、あまり図書館を利用されない先生方との接点もうまれた。さらに図書館に対する意識も少し変化してきている。「最近の図書館は頑張っているよね」といった言葉も複数いただいた。こんなにうれしいことはない。その意見がより多くの先生や職員に広がっていくように活動をしていきたいと思っている。

図書館と県民のつどい埼玉2010記録

「大学図書館のお宝お見せします」合同特別企画「私たちはあなたの一歩を応援します！～ご存知ですか？お仕事支援～」

「図書館と県民のつどい埼玉2010」が、平成22年10月2日(土)、さいたま市文化センターを会場として開催され、埼玉県大学・短期大学図書館協議会（SALA）の事業として参加した。

今回は、SALAメンバー館の8機関による「お宝」の紹介のほかに、公共図書館・埼玉県産業労働部との合同特別企画によるビジネス支援をテーマとした特別企画を行い、展示会は終日盛況であった。

各大学の展示内容は、次のとおりである。

（跡見学園女子大学）

本学図書館は、新座図書館と茗荷谷図書館の2館体制である。茗荷谷図書館には、さまざまな古い資料がありそのひとつにSPレコードのコレクションがある。いまやあまりお目にかからなくなったふるいメディアであるが、それなりの魅力がある。今回の展示

は「音声メディアの変遷」と題して、SP レコードをはじめ、所蔵する音声記録を紹介した。来場された方はみな興味深げにごらんいただけた。

（国立女性教育会館）

国立女性教育会館は、女性アーカイブセンター所蔵「奥むめおコレクション」から、消費者運動に関係する映像資料等を展示した。奥むめお（1895 ～ 1997）は、戦前・戦中・戦後を通して暮らしに根づいた女性運動を展開し、日本の消費者団体の草分けである主婦連合会初代会長としても有名である。全国規模の女性団体が共同開催した「物価値上反対婦人大会」（昭和 36 年）の映像には、主婦会館（四ツ谷）での大会後、かっぽう着姿で主婦連合会初のデモ行進をする女性たちの様子が当時の世相とともに記録されている。加えて、観覧者は関連する写真やビラ、新聞など資料を手にすることができ、あらゆる世代に消費者運動の歴史を知らせる興味深い展示である。

（淑徳大学）

「拓本の世界ー石に刻された中国歴史資料」と題して、春秋時代から唐時代までの 1500 年に亘る時代の変遷による書体の変化をたどれるような作品展示を行なった。2004 年に西安で発見され、日本でも話題になった「井真成」の墓誌や書聖「王義之」の作品も展示し、県民の方に美しい書体をお楽しみいただいた。

（城西大学）

本学は「漢方医学古書と道具」を展示した。これらの資料は本学薬学部において現代の医療、薬学、栄養学を学習する上で日本古来の漢方や医学書を学ぶ重要性と、建学の精神である「学問による人間形成」に結びつく学士力・人間力の涵養に資することを目的として蒐集しているものである。

【主な展示品】

- **「解体新書序図」（安永 3 年刊行）**
- **「傷寒論辨正」（寛政 2 年刊行複製）**
- **「貝原養生訓」（天保 5 年刊行）**
- **薬匙、薬籠、薬缶（鎌倉時代、江戸時代）**

古書や実際に使われていた薬匙、薬籠などをご覧いただき、一般の方と交流ができたことは大変有意義な機会であった。

（女子栄養大学）

展示テーマを「育てる、作る、食べる－農園体験から－」と題し、創立者香川綾が食や健康に関わる人材育成に欠かせないものとして作った『農園』が、現在も“農園体験"という授業科目によって、その精神を引き継いでいることを、農園作業・農園の今昔写真や植物関係、食育関係資料の展示により伝えた。主な展示資料は「野菜を育てて学ぶ食育実践 BOOK」、「いのちを育てるこころを育てる」などで、その他に農園の草花 4 種類（さつまいも、にんじん、にら、そば）の名前あてクイズを実施。ヒントは展示資料にあり全問正解者に小さな草花のブーケを提供した。

（聖学院大学）

「ライブラリアンは電子出版の夢を見るか?」と題した展示を行った。本の歴史を形態的に辿ることを目指し、メソポタミア文明の粘土板（複製）から、パピルス、写本、活版印刷、絵巻、折本、和本、洋本、電子書籍用端末（Kindle、iPad など）を展示。美装本や仕掛け絵本、マイクロブック（豆本）といった変わり本も並んだ。また「聖学院学術情報発信システム SERVE」（機関リポジトリ）や、そのシステムを通じて社会に還元される大学の研究成果についても紹介した。

（文教大学）

テーマを「フランス近代国民教育制度の成立と発展」として、フランス革命期の教育改革の様子を伝える小冊子やポスターを展示（抜粋）した。(1)「王国の諸中等学校における公教育に関する法律」[1791 年]（教会勢力を排し国が教育を行うという「教育の世俗化」を示す）、(2)「コレージュ(中等学校）教員の給与に関する国民公会の政令」[1793 年 2 月 14 日]（教員の給与を革命以後は一定の基準で共和国が受持つことを示す）、(3)「パリ市芸術リセ設立のための四分の一株券」[1792 年 8 月 12 日]（パリ市に芸術リセを設立する資金を集めるために発行された株券）

（立正大学）

立正大学図書館は、昨年に続き田中啓爾文庫の中から、主に江戸期に出版された江戸切絵図や和装本、明治初期に出版されたちりめん本などを展示した。展示においては、来場者がより深く理解しやすいよう工夫したので、関心が良かったようだ。

例えば、ちりめん本は、直接触る機会を設けたり、道中すご雙ろく六図は、肉眼では見え難い精巧な部分を虫眼鏡を使って観察して頂いた。

主な出展品目：

「長崎和蘭陀屋鋪圖」
「新版東街道五十三次行列雙六」
「参宮上宮道中一覧雙六」
「ペルリ提督日本遠征記」
「豆洲下田港之圖」
「江戸より長崎まで道中圖」

活動報告 2010

文教大学越谷図書館 鈴木 正紀

●第23回総会（2010年5月27日）

第23回総会を、跡見学園女子大学において開催した。

平成21年度事業報告などの報告の後、（1）平成22年度事業計画、（2）平成22年度予算、（3）平成22年度幹事館及び会計監査館の選出、などが協議され、いずれの案件も原案通り承認された。

続いて、曽田修司氏（跡見学園女子大学マネジメント学部教授・図書館長）により、「経営資源としての図書館」の演題で講演が行われ、盛会のうちに終了した。参加数は29機関45名（他、委任状提出13機関）だった。終了後、図書館見学及び意見交換会を行った。

●図書館と県民のつどい埼玉2010（2010年10月2日）

さいたま市文化センター（南浦和）を会場として開催された標記イベントに「大学図書館のお宝お見せます」第3弾としてSALA加盟機関中8機関の所蔵資料を展示した。また、「ご存知ですか？　お仕事支援　大学編」として、21機関の「ビジネス支援」（図書館の学外者公開、公開講座、社会人入学制度など）に関する情報をまとめた冊子を作成、配布した。また各機関から公開講座等の資料提供を受け来場者に提供した。同時に、7機関からの持ち寄りによるビジネス支援関係の図書約80冊の合同展示を行った。

●研修会（2010年11月8日）

第22回研修会を「ILL担当者へ贈るリポジトリ活用術～紀要の電子化とオープンアクセスを考える」とのテーマのもと、獨協大学で開催した。46名の参加があった。今回の研修はデジタルリポジトリ連合（DRF）の地域ワークショップの一部を形成するという性格をもった。講演、事例報告ののち、木村得朗氏（駿河台大学）の司会により全体討議が行われた。終了後、講師を交え意見交換会を開催した。

●その他

SALA会報第19号を3月に発行した。

●幹事会

幹事会は総会で選出された幹事館で構成し、当会の運営にあたっている。平成22年度は4回の幹事会を開催した（予定を含む）。役割分担については、従来の企画、広報といった大きな枠の分担を見直し、当年度の事業課題（レギュラーなもの及び当該年度に特有のもの）を設定し、それらに対して幹事が担当（おおむね、複数の事業に対して複数の幹事が担当）となって対応するという形を取った（分担についての詳述は紙幅の関係で割愛）。

幹事会の構成は以下の通りである。

代表幹事館：文教大学越谷図書館

幹事館：跡見学園女子大学図書館、国立女性教育会館女性教育情報センター、埼玉女子短期大学図書館、埼玉大学図書館、十文字学園女子大学図書・情報センター、淑徳大学みずほ台図書館、城西大学水田記念図書館、駿河台大学メディアセンター、聖学院大学総合図書館、大東文化大学60周年記念図書館、東洋大学附属図書館川越図書館、獨協大学図書館

なお、会計監査は目白大学岩槻図書館が担当している。

おかげさまで120周年。
株式会社 三省堂書店
北東京営業所
〒123-0872 足立区江北7-11-8
Tel 03-3896-7255 Fax 03-3896-6331

プロフェッショナルのためのインターネット書店！
BookWeb Pro
http://bookwebpro.kinokuniya.co.jp
紀伊國屋書店 首都圏北営業部 〒330-0061 さいたま市浦和区常盤 7-3-16
tel: 048-822-0775 fax: 048-822-0765 e-mail: to_kita@kinokuniya.co.jp

ナレッジワーカー KNOWLEDGE WORKER
全面リニューアル！
<本のネット購入サービス>
http://kw.maruzen.co.jp/
MARUZEN
【教育・学術事業本部 大宮営業部】
さいたま市大宮区吉敷町1-41 明治生命大宮吉敷町ビル4階
TEL：048-641-7221 FAX：048-641-7455

おかげさまで60周年
埼玉をもっと元気に!!
望月印刷は埼玉を支えていきます。
情報を最適なメディアで
望月印刷株式会社
総合印刷・マルチメディア・オンデマンド印刷・広告代理業
本社工場 〒338-0007 さいたま市中央区円阿弥5-8-36
TEL.048-840-2111㈹ FAX.048-840-2121 http://www.avenue.co.jp/

会報 第19号 2011年3月31日発行
編集：獨協大学図書館、埼玉女子短期大学図書館
発行：埼玉県大学・短期大学図書館協議会 http://www.sala.gr.jp/
代表幹事館・事務局 〒343-8511 越谷市南荻島3337
文教大学越谷図書館 ☎048-974-8811 内線1707 FAX048-974-8040
印刷：望月印刷株式会社 〒338-0007 さいたま市中央区円阿弥5-8-36 ☎048-840-2111 FAX048-840-2121